市民に送る夕べ
記念講演

どなたでも参加できます。（無料）

仮題「子どもたちの豊かな学び」

～イギリスとフィンランドの対応の違い～」

講師　福田（ふくた）　誠治（せいじ）さん

１９５０年岐阜県生まれ。東京大学大学院教育学研究科博士課程
現在　都留文科大学文学部比較文化学科教授　副学長
著書　「競争やめたら学力世界一～フィンランド教育の成功～」（朝日選書）
「競争しなくても世界一」（アドバンテージサーバー）
「人間の能力と人格」（文化書房）　ほか　多数

期日　11月20日（土）
時間　15時00分～16時50分
（受付　14:30から）

場所　鹿児島市黎明館講堂

主催：民主教育を守る県民会議（099-223-8345）

福田誠治さんエッセイ

「未来の学力を子どもたちに」

毎年、受ける子どもも違えば設問も違うのに、それを比べて一喜一憂するというのだからずいぶんと妙な話だ。ある県では、「準備が足りなかった」と反省する。学力テストは「調査」なのだから事前に準備してはいけない。なのに、テストのために準備することが勉強だと日本では広く思われている。

常識外れのことだが、「テストをすると学力が下がる」「競争するとやる気がなくなる」のだ。なぜなら、テストのための勉強ではテストに出そうなところしか覚えようとせず、人生への本当に必要なことを学ばなくなるからだ。テストが終われば忘れてしまうし、入試が終われば遊び始める。

「いいか、ここをよく覚えておけよ。テストに出すぞ」「そうか、ここが出るのか。」こうして、教科書にマーカーを引いて一生懸命覚える。テストを受けると、その通り出ている。「しめたしめた」ではない、そんな「問題」を出すからいけないのだ。「出すぞ」と言ってその通り出すなんて、いかさまなのだ。「覚えておけ」と言ってその通り出すなんて、カンニングを奨励するようなものだ。

教員評価というのは、テストの点数などの成果が「その年」の「その先生」一人が「作り出した」ものと見なして実施される。ところが、その子の成績は、それまでの学習の蓄積でできあがっていて、前の年の先生が土台を作っていたから可能なのかもしれないし、家庭の教育のおかげかもしれないし、たくさんの先生の影響かもしれないし、時間・空間で切り離しがたいものなのだ。切り離せると思えるのは、計算力とか漢字の読み書きなど単純で訓練的な学力を念頭に置くからに他ならない。

実は、子どもは教師の教えた通りには学ばない。教師の教えた以上のことを学ぶこともあれば、教師の教えたことと逆のことを学ぶこともある。教えた通りに、全国同じ順序で、同じペースで、同じことを学ぶというのはまったく不自然なことだ。違う順序で、違うスピードで学んだとすると、「出来損ない」「落ちこぼれ」と言われることもある。日本では、未だに、「知識・技能の国民パック」が強制され、たった一つの尺度しかない。「どの子も 100 点を」と悪のりする教師もいる。グローバルな時代に、100 年前と同じ井の中の蛙状態なのだ。子どもたちの育ちゆく社会は、国境の壁が低くなり、親の想像を絶するほどに多様な人々が交流する新しい時代なのだ。新しい時代には、「考える力」「学び続ける力」など新しい学力が評価されるはずだ。もし、受験やテスト競争がなければ、そのエネルギーと時間を自分の人生のために使って、本当に必要な学力がもっと伸びるであろう。

【福田誠治】